YMCAが昔も今も若者に提供しているもの

只野：当時は定例プログラム以外の日にもYMCAの近くにあった喫茶店などで仲間と議論を交わしたり、泊まり込んで話していたことがよい刺激になっていました。

錦織：学生時代は“熱心にYで活動した！”という感じではなく、自分の生活とYMCAの活動がありました。しかし、これから社会人となる前の時期に、将来何をしたらいいのかという漠然とした不安や、家から離れ自立したいと思っていた自分にとってYMCAは居場所でした。家出願望の行きつく先がYMCAだったのです。

　そしてリーダー仲間と交わり、よく語り合ったのを覚えています。語り合う中で、なにかしら共通体験を築いていたのだと思います。

松下：当時、大阪の公立高校にハイ-Yクラブがあって大阪ハイ-Y連盟が組織され、各学校からYMCAの少年部によく集まって語り合いました。

　そこが私たちにとっての居場所でした。その一方で少年部のスタッフも私たちの高校に自ら来られて聖書研究をしてくださり、私たちにいろいろお話くださいました。

錦織：今でもリーダー同士熱く語る時間はありますか？

池永：リーダー同士では「今のリーダーは厳しさが足りない」という意見があります。皆さんのお話を聞いていて、熱さが足りないなと思えてきたけど、今のリーダーもいろんなことを語りますよ。

　最近リーダーコーナーが無かったり、小さかったりするYMCAもありますよ。東YMCAも無いに近い状態です。リーダーには場所がいると思います。

只野：たわいもない話をしていることが多いのですが、リーダーにとってリーダーコーナーの存在は、物質的なものというより、精神的な意味がありますよね。

錦織一郎さん（大阪ＹＭＣＡ総主事）

松下広子さん（大阪ＹＭＣＡ常議員）

池永聡志さん
（東ＹＭＣＡボランティアリーダー）

只野準一さん（大阪ＹＭＣＡ常議員）

目に見えない関わり、働きかけ

松下：高校1年生でYMCAに来た時は、3年生の先輩がとても大きく見えました。素敵な存在への憧れがありました。

錦織：ロールモデルになる先輩がいました。自分が将来ああなりたいと思える人の存在というのは、次の自分の行動を決定していく上で大きな意味をもつと思います。

只野：誰かが辞めたいと言い出せば、みんなで一緒に考えて一緒に悩むんですね。

池永：自分が大学1年生の時に4年生が2人辞めていなくなり、使命感だけが僕を支えていました。

　でもその時の担当スタッフが、悩みを聞いてくれて、支えてくれました。その時のスタッフには子どもを惹きつける魅力があり、学ぶところがたくさんありました。

錦織：リーダーに関わるときは、大学1年生で入ってきたリーダーが4年生になった時にどうなっているかを常に考えていました。一人ひとりに対してそのリーダーが大学生の間にどう成長していけるかを描いていくのがスタッフの大きな役割だと思います。

　スタッフがリーダーに関わり、そのリーダーが子どもたちに関わっていく時に、初めて人と人との繋がりができて、子どもたちへのよい影響が与えられるんです。

只野：そんなふうにリーダーのことを考え、見守っていてくれるスタッフの存在も大きかったと思います。単純に学生だけの集まりだけでなく、プロフェッショナルとしてスタッフが存在しているという仕組みが、YMCAらしい大切なところなんだと思います。

松下：ハイ-Y時代のスタッフからいろいろと学びました。YMCAとは何か、YMCAの赤三角のマークの意味、自らの体験から出てくるキリスト教への思いも聞きました。そういったことがあって先輩に連れられて教会に通い始めました。そして受洗したことで、いつの間にか自己改革させられていったのだと思います。

　先日東山荘でハイ-YのOB・OG会があって共に話し合った中で、多くの方が当時のハイ-Y経験が現在の自分を形作っていると語られていました。よい指導者がいたこと、いい出会いがあったということは幸せだったと思います。OB・OG会が懐かしいだけで集まるのではなく、時代は違うけれど今の青少年に熱い思いとメッセージを発信していきたいと願っています。

只野：YMCAは自己実現の場。YMCAには年齢に応じた学びがあります。

　YMCAと職場の違いは、スタッフとボランティアは雇用関係ではないということ。ボランティアは自分の意見をスタッフに伝え、スタッフもそこから新しい発想、展開をつなげていくことができると思います。お互い切磋琢磨できる場なんですよね。

池永：アルバイトもしないといけないし、YMCAとの両立は時間調整が本当に大変だけれど、YMCAで学んでいることはどこでも生かしていけるなあと思います。

未来のYMCAを形づくるために

松下：講座を開くなど何を仕掛けないとダメ。さなきっかけをたくさん作って、いろいろな人が関われる機会をつくっておくことが大切です。

只野：しかけは楽しいも！　そして、しかけも必要ですが、受け入れ体制ができていないとダメです。新しく参加してきた人にいきなり「YMCAとは・・・」と始めると気持ちが引いてしまいます。ゆっくりゆっくりでいいから、知り合って、一緒に活動して、徐々にYMCAを理解してもらうことが大切。

池永：後輩に何を伝えられるかを3年目になって考え始めました。リーダー同士、お互いをもっと知り合う必要があると最近感じます。「あれをしろ！」「これをしろ！」だけの繋がりはいけないと思います。

　リーダーとメンバーとの間にもそれは当てはまることですね。メンバーをリーダーが見守り、リーダーの中でもフレッシュをオールドが見守り、リーダーをスタッフや委員が見守る。

松下：そのためにはやはりスタッフやコアとなっているボランティアの役割って大きいなと思います。

錦織：自分が変わった時というのは、何かのきっかけで自分が受け入れられたと感じた時ではないでしょうか。中に入って体験してわかっていくこと。その変化はいろんな段階であるべきです。様々な関わりの中で影響し合うのが大切だと思います。

　ボランティアと関わるスタッフはできる限りボランティアと共に居る。聖書の中でイエス様が行っていること。「その場に居てうなずいていた」存在感を持って関わることに意味があると思います。

只野：いろいろな委員もそうだと思います。その場に居るという意味は重要です。

錦織：YMCAは人が生きていくことに関してたくさんのポケットを持っています。

只野：この年になっても自分が磨かされていると感じます。これもYMCAのポケットから出てきたことだと思います。

　そして僕の夢はミッションにある公正で平和な社会を作り出すことなんですが、まず、今は公園でホコリまみれになって子どもたちのために映画の上映を続けます。

松下：私はYに芸術・文化のサークルができないかと考えています。年齢にとらわれず、いろんな人が関わって作り上げていくプログラムができたらいいな。

池永：いろんなことを経験してそれを将来の子どもに伝えていければと思います。

錦織：青年の家出願望の場としてのYにしたいですね。またYには生涯とどまっていたいと思います。

　今回紙面に登場頂いた方のお話を通じて、YMCA活動に関わるきっかけとなったできごとや、年数、内容は人それぞれに異なり、多種多様にわたっていることを改めて感じました。そして、その関わりの中で人を通して、新たな発見や変化を実感することが、活動を継続させる力となっているのだということを確信しました。（編集室）

※ハイ-Y…昭和20年代、YMCAはレイリーダーと呼ばれる若い有志指導者の養成に力を入れ始め、少年事業・青年事業のクラブ活動を広く展開した。館外活動として大阪市内の新制高校内でハイ-Y活動が開発され、昭和23年にハイ-Y連盟を組織しYMCAにおける高校生の活動が活発化した。